



同じ月

晴海まどか

同じ月

こんなはずじゃ、なかったのに。

今年のお年玉で、新しい浴衣を買った。白に黒のグラデーションの地に、鮮やかなピンク色の花が咲き乱れ、薄水色の蝶が舞う。デパートで一目見た瞬間、これだと思った。この浴衣は、私に買われるのを待っていたんだという、確信すら覚えた。

なのに。

華月川の土手沿いに作られたプロムナード。私はそこに腰かけ、雑草がぼうぼうと生い茂る河川敷を見下ろしていた。ここから数キロ離れた海浜公園で、もうすぐ花火大会が始まる。花火の見えないこんな薄暗い土手には、通りがかる人すらいない。等間隔に並んだ街灯は、空しく青白い光を放つ。

——今年は、花火大会、一緒に行けないんだ。ごめん。

夏休みが始まってすぐの、地元の花火大会。毎年一緒に行こうだなんて、そんな約束を交わしたことはなかった。幼い頃からの慣習で、花火大会の季節が近づくと、どちらともなくもうすぐ花火だね、なんて会話を交わして、今年も行こうか、なんて流れになって。

それが永久に続くと思っていたのは、どうやら私だけだったらしい。ということに気がついたのは、浴衣を買ったあとだった。

タカシくんには彼女ができた。

高校の部活仲間だそうで、まるで子猫のように愛くるしい女の子だった。学校帰り、家の近くで私は二人にぼったり遭遇した。大人びて見える高校のブレザーを着たその彼女を見て、自分に勝ち目なんかパーセントもないことを悟った。かわいらしいと地元では評判の中学校のセーラー服も、私の幼さの象徴でしかない。

妹みたいなもんなんだ。そう私のことを彼女に紹介したタカシくんを、私の目を盗んでいつの間に！ と小突く以外、私にできることなど何があっただろう。今年もタカシくんと花火に行かないの？ そう訊いてくるであろう母親の目をごまかすために、着たくて着たくてしょうがなかった浴衣を、着たくて着たくてしょうがなかったふりをして着て家を出る以外、私に何ができただろう。

ごめんだなんて謝ってほしくなかったとすら、言えるはずもない私に。

昼間は濃緑色に濁っている華月川だったが、夜になるとその水色は判別できない。同じだった。どんなにかわいい浴衣だって、こんなに暗いところじゃ色も柄も意味はない。誰にも会いたくなくて、自分からこんなところに来たというのに。運命的な出会いをした浴衣の柄を見るたびに、あまりにもったいなくて、その柄に憎しみすら覚える。

膝を抱えて座っていたら、ドンツと腹の底まで響く爆発音が静寂を破った。花火大会が始まった。思わず耳を塞ぐが、花火が打ち上がる音は、ひっきりなしに体に直に響いては、余韻を残す。

一時間半の我慢。そう言い聞かせ、浴衣に包まれた体を縮込ませた。

どれくらい、経っただろうか。

花火の爆発音にも慣れてきた頃だった。爆発音に混ざって、小さくカシャン、カシャン、という金属音が聞こえてくることに気がついた。

体を丸めていた私はいい加減足が痺れてきていたこともあり、そろそろその場で立ち上がった。街灯に照らされた私の影が、河川敷に長く伸びる。

私から向かって右側には、ひかり大橋と呼ばれる高架道路があった。河川敷はその高架道路の下まで続いていて、ひかり大橋の下には人が棲みつかないようにと、金網のフェンス。どうやら謎の音は、そのひかり大橋の方から聞こえてくるようだ。

下駄をかかかこと鳴らしながら、プロムナードを歩いてひかり大橋に近づいた。見下ろす河川敷には街灯がなく、ひかり大橋の上からこぼれる明かりで、河岸と川の境目が薄っすらと見えるくらいの明るさだった。

カシャン、という音は一定の間隔でまだ続いている。

一体何が。そう思ってプロムナードの縁から身を乗り出した私は、慣れない下駄でバランスを崩した。

あっと声を上げる間もなかった。ぐるんと視界が回った。河川敷に向かって、青くさい雑草の生い茂る坂を転げ落ちた。体はぐるぐると何回転かして、止まった。

何が起きたのか、咄嗟に判断できなかった。突然のことに、ついていけない。首をめぐらせて浴衣を見ると、雑草と土埃で無残なことになっていた。上半身を起こす。不幸中の幸いか、大したケガはなく、浴衣も着崩れてはいなかった。そつと後頭部に手をやる。結っていたお団子は潰れた餅のごとく崩壊していた。

私は半ばやけくそになって、その場に仰向けになった。手足を広げて大の字になり、目蓋を閉じた。

最悪だ。本当に、最悪だ。

少しして、花火の音に混じっていた、カシャンという音が聞こえなくなったことに気がつき、目蓋を開けた。

数歩離れたところから、私を見下ろしている少年がいた。

まず目についたのは、その少年の手だった。遠くの街灯に照らされたその拳は関節がささくれ立ち、ぱっくりと開いた傷口がてらてらと光っている。その手から、視線を上げる。逆光で顔は見えない。だが、光を透かす、銀髪。私は息を呑んだ。

袴田祐貴。

『触らぬ袴田に祟りなし』

それは冗談ではなく、我が二年B組のみんなが心に留めている言葉だ。

袴田はキレる。

去年の四月。中学校に入学して早々、親愛の意を込めて袴田をからかった男子生徒が、顔面をグーで殴られて前歯を折った（今考えると、これは袴田がキレた理由が明確な唯一の事例だ）。それ以来袴田に絡もうなんて生徒はいなくなったにも関わらず、袴田はキレ続けた。何が気に食わないのかわからない。能面のような、死んだ魚のような目をした無表情で、椅子を、机をなぎ倒し、窓ガラスに拳を突っ込んで自らの腕を血だらけにしたりする。

要は、ちょっといっちゃっている奴だということだ。入学後すぐに髪色を白に近い銀色にしてきたことも、狂気の片りんを覗かせているようで、周囲の生徒に恐怖を与えた。

そのくせ、袴田の成績は常に学年一位だった。おまけに父親が地元の有力者だか何だかで、先生たちもあまり大きなことは言えないらしい。まさに狂犬の放し飼い状態。二年B組の生徒たちにとって、袴田の存在は触らぬ神以外の何物でもないわけで。

そんな袴田が、自分を見下ろしている。

ぱっと上半身を起き上がらせ、頭や浴衣のあちこちについているであろう雑草を払うことも忘れ、私は体を引いた。

袴田は、あたふたする私の様子なんか微塵も気にしていない。じっと私を見下ろしていた視線を、ずっと天に向けた。

「花火より、月の方が綺麗だと思う」

この言葉の意味を、すぐには理解できなかった。それは私が知っていた袴田のイメージ—— `綺麗、だなんて言葉を吐くわけがない——とはあまりにかけ離れていて、予想外すぎた。理解できない言葉はそのまま脳に意味どおりの文字情報として伝達され、私は夜空に向かって首を九十度曲げていた。

花火の爆音にも揺らがない、煌々とした白い光。満月。

その輪郭を捉えた瞬間、覚えたのは殺意にも似た羞恥心で、カツと頬が熱くなった。

袴田なんかに、何がわかる。

脱兎のごとく逃げ帰ったその翌日。近所の本屋さんに行くついでに少し遠回りをして、華月川沿いのプロムナードを自転車で走った。

昨日の出来事が私の中で尾を引いていた。悪夢を見たあのような後味の悪さだけが残っていて、それが現実にあったことなのかどうかを確信できずにいた。そうして、気がつけば今日もまたここに来てしまった。緑色の絨毯のように雑草が繁茂する河川敷。キラキラと光るどぶ川。強い日差しと微かにそよぐ温い風。あまりに平和な風景に、昨日のことはやはり夢だったんじゃないかと思えてきた――が。そこに、座っている袴田の背中を見つけてしまった。何をすることもなく、足を投げ出して濁った華月川を眺めている。

袴田は自転車の私に気づいたが、声をかけるでも手を振るでもなく、ちらっと視線を寄こすのみだった。私の視線は、そんな袴田の手の甲に釘づけになる。昨夜は暗くてわからなかったが、昼間だと遠目にもわかるくらい、そこは赤黒い。殴りだこ。それだけ確認して、私は再び自転車を走らせた。

それ以来、私は毎日、河川敷を、袴田を見下ろすために、プロムナードを自転車で走った。袴田はいつだって河川敷にいた。そんな袴田のことが――違う、袴田が何を壊したいのかが、気になって気になってしょうがなかった。タカシくんのことを考えないようにするために、脳に無理やり袴田のことを考えるように仕向けられているのではないか、と思えるほどに、私の探究欲は袴田だけに向けられた。袴田はそんな私に声をかけるでもなく、うっとうしがるでもなく、いつだってちらと見やるだけだった。川に石を投げながら、木の枝を折りながら、乗り捨てられた自転車を乱暴に蹴飛ばしながら、ちらと私を見る。

だけど、夏休み最終日の八月三十一日。

袴田は、河川敷に現れなかった。

「袴田が、自殺未遂で病院に運ばれたって」

翌日。始業式が終わって体育管から教室に戻る途中、袴田の近所に住んでいるというクラスメイトが、興奮した様子で教えてくれた。

「自宅の二階から飛び降りたんだって」

植木の上に落ちてほとんど無傷だったらしいけど。友人は、残念そうに付け加えた。

袴田の父親は仕事で家をほとんど空けていて、一方の母親も海外で暮らしているという。それぞれ愛人のところで暮らしているらしい、というのは近所では有名な噂だそう。この辺りでは人目を引く大きな家には、袴田と週に数日だけくるお手伝いさんしかいなかった。庭で倒れている袴田を見つけたのは、通りすがりの郵便局員だった。

「そういえば、その手、どうしたの？」

クラスメイトは、私の手の甲を覗きこんだ。左手の大きな絆創膏を右手で隠して、「なんでもない」と私は曖昧に笑む。

その日の学校帰り、私は迷うことなくいつもの帰路から逸れ、華月川のプロムナードに向かった。いつもはそこから見下ろしているだけの河川敷に、降り立ってみた。やはり袴田の姿はなかった。

西の空が橙色に染まり始める。徐々に薄暗くなっていく河川敷をゆっくりと歩いた。雑草を踏みしめる足音がいやに大きく聞こえた。ひかり大橋の手前まで来て、袴田の手の甲の塞がらない殴りだこの原因を知った。そこにある金網のフェンスには、錆とは異なる茶色っぽい染みがあちこちに付着していた。花火大会の夜に聞いた、カシャンという音を思い出す。

ふいに人の気配に気がついて振り返ると、少し離れたところに、まるで湧いて出た幽霊のように袴田が立っていた。頬や腕のあちこちに絆創膏が貼ってあり、腕にある紫色の大きな打ち身には思わず目を覆いたくなった。

「ケガ、大丈夫なの？」

自然にそんな言葉が口から出てから、袴田に話しかけるのが初めてだという事実気がついた。

袴田は雑草をぎりぎり踏み潰すように一歩ずつゆっくりとこちらにやってきて、金網のフェンスに、かきぶただらけの拳を勢いよくぶつけた。

カシャン。

ほんのちょっとだけ、赤い飛沫がフェンスの上で散った。それがまるで小さな花火のように見えて、気がついた。袴田を動かす、自己破壊への衝動。そして同時に、自分の中にいる袴田の存在。

同じだ。月の方が綺麗だと思ったあの日から、私の中にも同じものが棲んでいた。

セーラー服のポケットから、ぐしゃぐしゃに丸めた布切れを取り出した。自分で切り刻んだくせに、捨てられずにずっと持ち歩いていた浴衣の端切れ。それにはフェンスと同じように、茶色い染みが点々と散っていた。手の甲にハサミを突き刺したときに飛び散った、私の血。

こんなことをしても、意味なんてなかったのに。

端切れを掴んでいた指を開いた。茶色い水玉模様になった薄水色の蝶が、ひらひらと舞って、雑草の中に落ちて見えなくなった。

「月の方が綺麗、なんでしょ？」

袴田は答えず、初めて私をちゃんと見た。

〈完〉

パプー公開版 2013/5/29

晴海まどか 著